



第一章

スピリチュアリズムの揺籃時代



第一節 スピリチュアリズムは世界の要求

歴史を研究することはきわめて大切です。単にそれは学問のためとか、過去の出来事への興味とかいうことではありません。一つの運動や社会組織を、今後どうしたらよいかを考える上で、これはどうしても必要なことです。歴史の流れには一定の法則があります。過去の出来事はその一つ一つが、その流れの中で、ちゃんと所を得ております。従って、歴史の流れを分析していけば、そこにおのずから将来の見通しが出てくるというわけです。しかし、これだけではまだ十分とは申せません。現実には、思いもよらぬ出来事がしばしば起こります。従って、私達が将来を考える場合は、この新事実を程よく案配しながら、調整しつつかねばならないということです。

歴史はどのように発展するか

歴史はどのように移り変わるのでしょうか。その移り変わりの法則とは何でしょうか。

いつの時代を見ても、一つの運動とか団体には、必ず一定の組織と哲理と信条とが存在しています。丁度、十九世紀の宗教界で有力だった正教のようになります。しかし、これとても世間に大きな影響を与えつつ、今日では変わってしまいました。宗教に限りません。万事がこのように変化します。つまり、その時代に有力なものでも、時勢におくられると、別の進歩したものが現れて、これと対立することに

なります。

物事はすべて、いろいろなものと関係し合っています。教会にしても、経済発展や政治や法律、またダーウインの生物学の研究などにも影響を受けました。従って、歴史の一時期をとり上げて調べてみれば、必ずやそこに反対の因子があつて、発展の原動力となつていくことが分かります。丁度、ダーウインの進化論が正教に対したようにです。

教会の没落

これらの対立物は、時とともに互いに抗争しあい関係しあいつつ、ついには全く違った新しいものに發展します。その好例は、進化論と宗教の争いが、ついには唯物論となつて現れた、これでありました。この新しいものの誕生は、普通は突然起こります。戦争はその試金石の時です。この時、弱いものはたちまち尻尾を出し、新たな転換が起こります。第一次大戦に際し、宗教と社会制度は大動揺を来しました。特にロシアでは、教会は根こそぎ破壊されました。イギリスでも、教会は指導力を失つてしまい、しかし他方では、スピリチュアリズムが会員の増加をみたのでした。

我々はスピリチュアリズムの歴史を考えると、いつも一つの疑問に行き当たります。つまり、心靈現象は人類の歴史とともに古いものです。しかるに何故に、スピリチュアリズムの發展は、十九世紀の半ばまで待たねばならなかったのかと。一八四八年に至り、スピリチュアリズムは勃興しました。このことは色々な社会的發展と関係があることでしょうが、しかし何といつても、人類多年の生活経

験がものをいって、次第にここに至ったと言えましょう。

スピリチュアリズムの足場

この百年間に、近代産業はその地歩を確立しました。さて、これに必要な労働者は農村人口をあてたわけですが、彼等は無学であつたので、新しい工場制度で働かすためには、どうしても教育が焦眉の急務となつたわけです。こうして、十九世紀には学校が建てられ、科学知識が急速に広まり、ここに理性の世紀が始まりました。

さて、理性と教育がゆき渡ると、ここに、新しい科学知識と古い宗教的信条の間に、矛盾衝突が發生しました。つまり、教育は民主主義の基盤とはなつたが、他方では、古い信仰の組織をつき崩し、その精神世界での絶対權威を脅かすに至つたわけです。

權威の上にあぐらをかいてきた宗教も、過去においては必要なものだったし、また靈的な感化を人々に与えはしました。しかし、教育の普及に伴つて、真理探究者達の間疑問を生じ、ついに消えゆく運命となつたのです。

こうして、キリスト教の力が衰えると、これに代わる靈的支柱が人々の要望に應えて登場せねばなりません。だが、新時代の要望に應えられるのは、まずその本質において合理的であり、かつ、科学的法則に反しないものでなければならぬわけです。

従来、どの宗教にも根底には奇跡があり、奇跡は決して新しいものではありません。ただ、この奇

跡が今や誰にでも、合理的に解釈でき納得できるという事態が、ここに始まりました。つまり、心霊現象の合理的解釈がこうして進んでいくとともに、ついにそこから、社会の要望にこたえつつ、新しい霊的教訓がここに生まれて来るに至ったのです。

衰退から破綻へ

一方では、キリスト教の方は、時代の動きに応じなかつたので、世の法則どおり、やがて衰退から破綻への道をたどりました。つまり、教会は今日の唯物主義全盛の母体となつた科学に背を向けたために、大衆の魅力を失つたのです。というよりも、教会はその内に破綻の種子をはらんでいたと言えます。つまり、今日の教会はその実体が、きわめて唯物的で墮落しており、そのため、教会本来の霊的教義から見て、幾多の批判がその内部で起こつていたのでした。教会はあくまで古い殻に閉じこもりました。だが、世の中は年とともに新しくなつていきます。

心霊現象は人類の歴史とともに古いものですが、現在では、理性と科学の光の下に、これに新しい解釈が下されることになりました。今や、新しい哲学、新しい宗教が、民衆の手により、民衆の家庭から生まれていったのです。もはやこれは昔のように、坊さん達の専売事業ではありません。また、教会の権威の具となるものでもありません。これこそは、科学的民主的な民衆にとつて、科学的民主的な宗教の基礎となるものです。こうしてスピリチュアリズムが台頭してきました。すると、教会は一層古い殻を固くし、更にはことごとくに、この新時代の真理の普及運動に邪魔を始めたのでした。

心霊現象の研究はじまる

心霊研究は、一八四八年のハイズビル事件がきっかけとなって、それから数年後には、世界いたるところの文明国で開始されました。これに関心を抱いた人達は、通信を解読し、分析して研究を進めていきました。このような科学的研究は、十八世紀の一般大衆にはとても考えられないことでした。スピリチュアリズムは上層階級から生まれたのではなく、民衆の家庭から生まれたのでした。それ故にこそ、スピリチュアリズムは民衆の宗教となり得たのです。かれら民衆の家庭の暖炉の傍で、霊媒が生まれ、霊界通信の法則が樹立されていきました。その結果、死後の生存はもはや信仰ではなく、証明された事実となりました。やがて、その深遠な宗教的意義が明らかになっていくにつれて、二十世紀に入ると、霊媒を中心とした、スピリチュアリズム教会が成長を始めることになりました。

第二節 スピリチュアリズム以前の時代